

子ども家庭福祉におけるラップアラウンド・アプローチ ーノーバディーズ・パーフェクト・プログラムを中心にー

○ 関西福祉科学大学 遠藤 和佳子 (2809)

キーワード：子ども家庭福祉、ペアレント・トレーニング・プログラム、ラップアラウンド・アプローチ

1. 研究目的

子ども虐待は、現在、その数、内容ともに次第に深刻なものになっている。このような状況のもと、子どもにとってパーマネントな環境は必要不可欠であるという認識にたち、子どもの最善の利益と照らし合わせながら、家庭が安全で安定した育ちの環境となれるようサポートするプログラムが重要視されている。子ども虐待に対して、子どもを保護するにとどまらず、家族を再統合し支援していこうとする試みが次第におこなわれるようになってきているのである。だが、たとえば虐待を繰り返す家族のなかには、どうしても再統合が不可能なケースも含まれる。そうしたとき子どもを性急に家庭復帰させたとすれば、子どもたちの生命そのものが危険にさらされてしまうケースも少なくない。そうならないためにまず大切なことは、子どもたちとその保護者たちが自らの家庭を再構築できるコンピテンスを身につけることができるようサポートしていくことである。ペアレント・トレーニング・プログラムは、そのための有効な手段となっている。たとえば、子ども虐待がひきおこしてしまった親に向けて行われているペアレント・トレーニング・プログラムに、COMMON SENSE・ペアレンティングやMY TREE ペアレンツプログラム等があるが、ただし、深刻な虐待を引きおこしてしまっている親たちの場合、このようなプログラムにはじめから参加することさえかなわない人たちが少なくない。そうした場合、地域における多様な人びとを巻き込み、彼らの支援のもとで、家族が「自ら育ちたいと願う主体」となるようにしていく必要がある。彼らが「ケアされるべき対象」としてプログラムに参加させられるのではなく、彼らの暮らしの中で「育ちたいと願う主体」としてプログラムに参加することを可能にするペアレント・プログラムを新たに構築すること、これが今、非常に重要となっているのだ。

2. 研究の視点および方法

以上のことを考えるうえで、「ラップアラウンド・アプローチ」というソーシャルワーク手法のアイデアは、大きなヒントを与えてくれる。ラップアラウンド・アプローチは、アラスカの児童精神保健局 (Children's Mental Health Services) のコーディネーターによって開発され、その後、ワシントンなど米国 30 州の 100 箇所以上で取り入れられており、きわめて有効な援助方法である。このアプローチではコミュニティを基盤として、子ども

と家族を支援していくためのチーム（Child and Family Team）が生まれ、このチームが主体となってサービスを展開する。従来のワーカー主導のサポートと異なり、ラップアラウンド・アプローチは、クライアントの自己決定を重視している。ラップアラウンド・アプローチでは、親や子ども、家族といったクライアントたちが自分自身でみずからをとりまく環境や問題に目をむけ、その意味をリフレーミングすることを重視しており、そのように自己をとりまく環境を変えうる家族のストレングスをエンパワーすることこそサービスの主眼がおかれるのである。子どもとその家族が、ワーカーの支援のもとで、地域の中で友人関係を形成しつつ、地域のつながりを自らが獲得し、地域をまきこんだ（ラップアラウンドした）形で自己のストレングスをエンパワーしていく。ラップアラウンド・アプローチのこうしたアイデアを借りながら、ペアレント・トレーニングのあり方を目指していこうとする際、ノーバディーズ・パーフェクト・プログラムは有効なものとなるだろう。本発表では、ラップアラウンドなソーシャルワークを展開するうえで、このプログラムが有する可能性について理論的に考察する。

3. 倫理的配慮

ノーバディーズ・パーフェクト・プログラムへの参加者は当然のこと、発表にかかわるすべての人びとのプライバシーを遵守できるよう配慮する。

4. 研究結果

ノーバディーズ・パーフェクト・プログラムは、1980年はじめに、カナダ保健省（当時はカナダ保健福祉省）と大西洋4州（ニューブラウンズウィック、ニューファンドランド、ノバスコシア、プリンスエドワードアイランド）の保健部局によって開発されたものである。このプログラムは、子どもとその家族が、ワーカーの支援のもとで、地域の中で友人関係を形成しつつ、地域のつながりを自らが獲得し、地域をまきこんだ（ラップアラウンドした）形で自己のストレングスをエンパワーしていく、新たなペアレント・トレーニング・プログラムを構築する際に重要なヒントを与えてくれている。

5. 考察

ノーバディーズ・パーフェクト・プログラムは、「健全な家庭」か「ささいな問題に直面している家庭」を対象とするもので、「深刻な問題に直面している家庭」か「ハイ・リスクな状況にある子どもたち」を対象として行われるペアレント・トレーニングとしては無理がある。しかし、ノーバディーズ・パーフェクト・プログラムにおいて見いだすことができるクライアントの主体性を尊重する原理と手法を核としながら、子どもの最善の利益のもとで彼らのウェルビーイングを保障するソーシャルワーク手法の開発が、子ども家庭福祉の領域において今後喫緊の課題となるだろう。